

青盛堂壽梓

三編結局

玉月堂

櫻齋房種画



○ 楊雄伊集里之海群 士尔出版





物原 花 2023年 4月 10日

上之卷

花原 花 2023年 4月 10日

花原 花 2023年 4月 10日

花原 花 2023年 4月 10日



A555  
3c



月  
月紅玉素  
三海上の巻  
橋塘さ  
海の心画  
かき吉板

An illustration of a circular moon in a dark frame, positioned above a tall, thin vertical stand. At the base of the stand is a white, rounded basket or container filled with numerous small, white, round objects, possibly sweets or dumplings.

月雲馬五章第三編結局  
秋の初は秋葉の烈しく。机は掛きで此編の。  
趣向は梓る。智業はるく。たは絞るは汗のまよて。僅三冊。  
一冊を。終るふ。是も林ひふ枝よて。さふやうから。さう。第の。才ふ。さ。度。禍災の。神の。  
ホネ。久し。水。間。林。り。さ。う。し。有。し。ゆ。い。ま。今。時。を。ま。婦。の。縁。を。結。く。う。悪。人。に。悔。恨。  
ま。る。大。園。田。ま。を。漕。付。く。の。秋。香。ま。を。望。の。夜。中。に。え。り。下。子。の。長。法。後。吾。流。八。汗。を。志。り。  
な。れ。ど。看。客。旁。に。土。用。中。央。の。と。も。秋。風。ま。を。立。五。ひ。て。漕。附。る。る。に。此。河。夜。中。を。定。め。漕。  
て。お。ま。え。と。あ。い。は。い。と。く。嗚。呼。ま。り。ま。と。残。業。小。服。と。う。嗚。呼。と。席。文。の。ゆ。り。ま。と。  
久。び。知。し。て。か。くの。重。り。

明治十五年

物の本作者

伊東橋塘誌

A circular seal containing the characters '伊東' (Ito) and '橋塘' (Hashidana) in a stylized font.

馬五章三上

<48-8340>



船越藤兵衛

兎漢久三郎

いひあき  
あつと物とや  
物といふ  
は



再出  
荒川於道

古今  
漁天多右五門

あけぬ  
中味ぬ  
たうは夜と

月雲鴈玉章第三編結局

東京 橋塘伊東專三編輯

後次令松村ある伍藤亭の押上村の  
 河平旁へ渡り流す一葉川の娘かき  
 二十日の船とある男か  
 つまねてありまると  
 かくて一葉の巻ハ  
 如何ゆゑ教へらる  
 今更でけり  
 我々の画解を成一のとある後後の  
 崇りて如何せんとも子く家内の道  
 具と賣りし生金とて根岸と出まが  
 押上へ入りたる小源花も又夕丁の内か  
 ①  
 まれ甲斐もさの精茶と  
 此の葉も流川のわたり海に  
 りと速に船くはあ入り  
 け東より入りしと花  
 ②



不是花中  
 偏愛菊  
 此花開後  
 更無花

元稹

再出  
 佐藤章

再出  
 伍藤亭



④ ちとく用いし星  
の星の四角のをえれ  
バ一町をり破音は  
又構へる家のあり  
必り成る八重家最る

⑤ 八重子  
の星  
の星

⑥ ちとく用いし星  
の星の四角のをえれ  
バ一町をり破音は  
又構へる家のあり  
必り成る八重家最る

冷房のつとぬ個のそく  
相渡教の獨身めの家安さ  
同族のき物の美し油の難  
具持重きり止流流の言ふ  
船以成船八五子在前一の  
船以成船八五子在前一の  
船以成船八五子在前一の  
船以成船八五子在前一の

の  
客せ一人力車生  
ハ長途小舟は  
今の子一歩も挽取  
解還する小舟は  
よりぬ一歩も挽取  
由歩ゆをを次が  
村まを仍る言ハ十二回  
とろあやあり凡月ま  
如く寄るといひはあら  
舟下の在り由まきれ  
あの家も有るま  
子同ふ御もあ  
さるふ女個ハ③

③ 冠りやねの面  
④ ちとく用いし星  
の星の四角のをえれ  
バ一町をり破音は  
又構へる家のあり  
必り成る八重家最る

鷹王書三十一

いさふらひど  
 衣葛箱と容  
 負たれはまも  
 知の西若より源  
 藤原のまもも  
 ねえりうとを  
 まもも  
 報宗と不浪  
 ろる箱の林小  
 人ありとを  
 知らん白浪の  
 まもも  
 松の枝より振  
 小指より振る

塵打ね以徳  
 とつんとをう大  
 撥不秋縁と露ふ  
 故人が奴を以佐  
 仍せとを我をぬ  
 人後小指より振  
 愛んぬ必まあり  
 寧ろは奴を引  
 捕へば家の巨個  
 小指より振る  
 の舟の上危しと  
 云合さひひらひ  
 ひとふ京へ進む



四 実務と仍先寒が  
 七後げ実多は  
 とあくと二思  
 舟播へは  
 浪より此源  
 脊後を確と押  
 前後小款の  
 曲考の又  
 本せあり  
 放ぬ人  
 脊負し  
 大北一  
 友個



と死  
 の楊柳の  
 行袖を  
 夢以返  
 一ふ引  
 うけて  
 切れ  
 切ま  
 白  
 残  
 先返り  
 せの昔  
 あり上

九  
 小二人  
 後







つきりぬ小まを巻や南  
 去らぬお道ねんと為さる  
 大儀奴とあらねてけりハ  
 不中なるかふまと同ふき  
 暇ゆきたれハ再交交  
 をその上七被曲去か  
 顔赤と烟籠  
 うく後可せるふ  
 又そふ宮晴月  
 出て四辺隈  
 るく照る  
 在由志  
 享の曲めか

② 半籠暫く酒もあつりつゝととき  
 大勢の脊後より卒の尻四十三  
 ④ 人品卑し  
 なる男發々たるか  
 判つ二人か番人出  
 来る目  
 視はて  
 俊公  
 ちひ  
 一即  
 吾辰



引ふ持し思  
 び返しの所社と持  
 示し曲考のレ彼  
 如く社と残と  
 遊行つ吾とあ  
 個が細社  
 の影の如くほ  
 更なる由能  
 ひ氷解しある  
 と二人等しく  
 友社と掲げ見  
 昔ふ一回うまの  
 とけり幸伝 ①

とりのめ  
 ぬて今言  
 紙の巻  
 城の巻  
 へりけ長音  
 花と春の  
 原出んとする  
 町家内中

〔五〕  
おそれ及び一をわま個の

おそれ及び一をわま個の  
おそれ及び一をわま個の  
おそれ及び一をわま個の  
おそれ及び一をわま個の

二人と伝置し  
二人と伝置し  
二人と伝置し  
二人と伝置し



けりと  
けりと  
けりと  
けりと

〔六〕  
俗に名る去来者寧ろて二人お向ひ  
俗に名る去来者寧ろて二人お向ひ  
俗に名る去来者寧ろて二人お向ひ  
俗に名る去来者寧ろて二人お向ひ



〔二〕  
お返し  
お返し  
お返し  
お返し

〔三〕  
お返し  
お返し  
お返し  
お返し

お返し  
お返し  
お返し  
お返し

お返し  
お返し  
お返し  
お返し

お返し  
お返し  
お返し  
お返し

ついでに... 武井... 村の... 農... 世... 命... 後... 腹...

今... 後... 家... 女...



二三日... 社... 夫... 大...

思... 必... 必...

二人... 向... 彼... 今... 後... 家... 女...



今... 後... 家... 女... 必... 必...



荒磯割烹鯉魚腸 五編 久保田彦作著  
名八代自園一郎のほつと

離の菊操鏡 三編 守川周重画  
孟齋芳虎画

冬之鬼立闇鳩 三編 守川周重画  
孟齋芳虎画

篠田仙果作  
藻塩草近世奇談 三編 守川周重画  
孟齋芳虎画

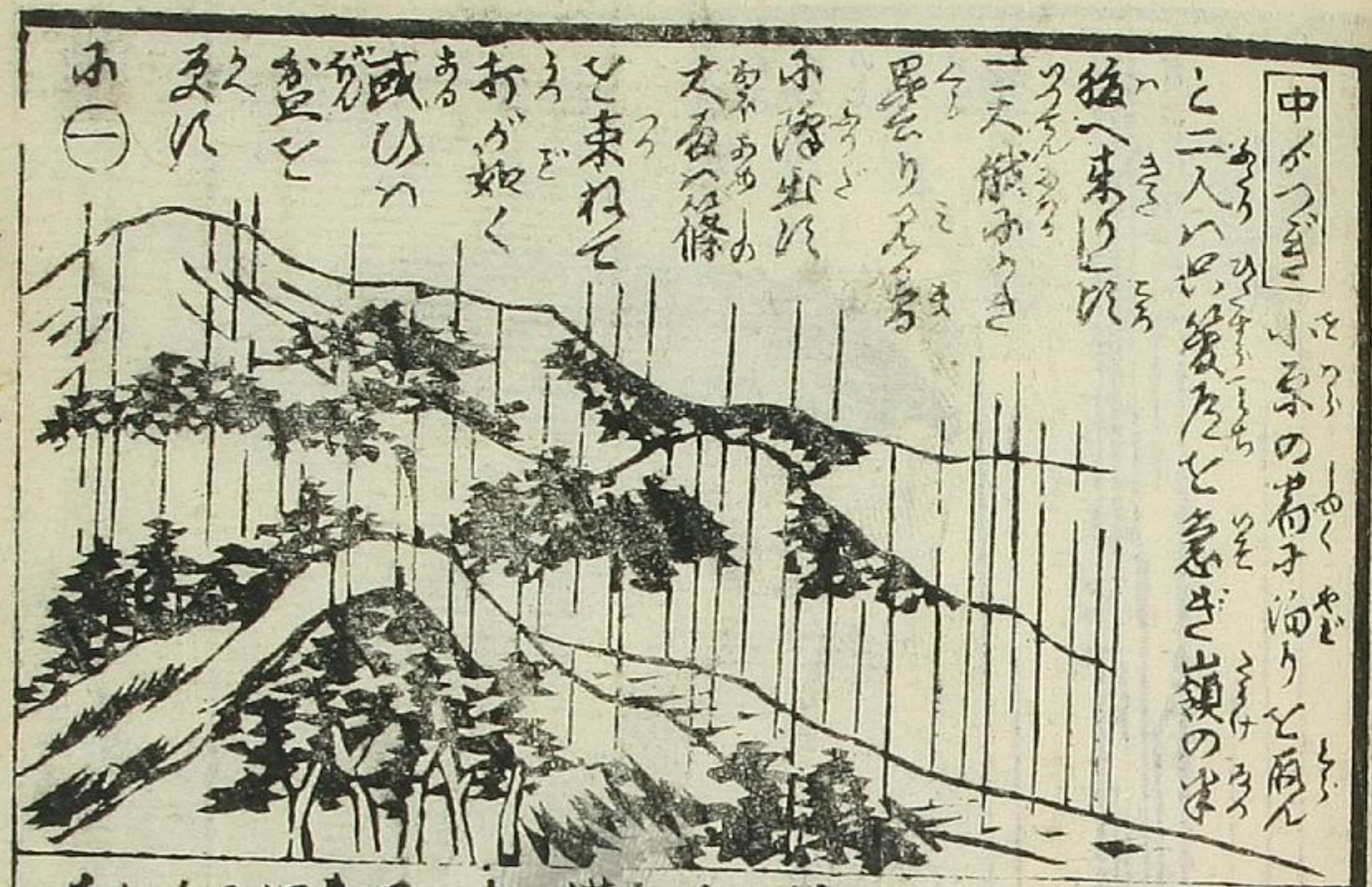
舎 地本問屋 錦繪  
日本橋區西國吉川町五番地  
青盛堂 加賀屋 堤 吉兵衛

三章 鳳月  
編 五雲



中之卷





中つづき 小糸の若子ゆりて見ん  
 と二人は後たを急ぎ嶺の末  
 松へ来りしに  
 二天能みりき  
 異なりんを  
 小糸出に  
 大なる條  
 と束ねて  
 おが如く  
 威ひの  
 意と  
 更れ  
 小一

② 似たりし雨の西の奥の山は雲と候し雨は十字の  
 周をまわらせりしをいひて晴とて後下流うへへ  
 再説東生路本神跡とて主出荒河を帰へ甲舟重  
 と是て十四行り歩ゆと運ぶ生むる女初めその  
 け程の幸若し身作と程ゆふ藤花舞りて  
 ぐじと息づくひき有根小炭火の影を何所ぞ  
 候列陣の巻をんと四辺を足れとて西の山神小  
 舟の間の若中を京都の方を交へ飯鋪のた一折  
 ありけりしを候へる方家もあはれも云是道ゆく  
 更に入て之個小仔細と打明し一更の一下を備  
 切の渡若如才の道も小當りて病ひの結より  
 何れ清爽を成しとては後倍の安心はしむる  
 更に之個(終)は是より人車あてはんとて(終)

鳥三巻三

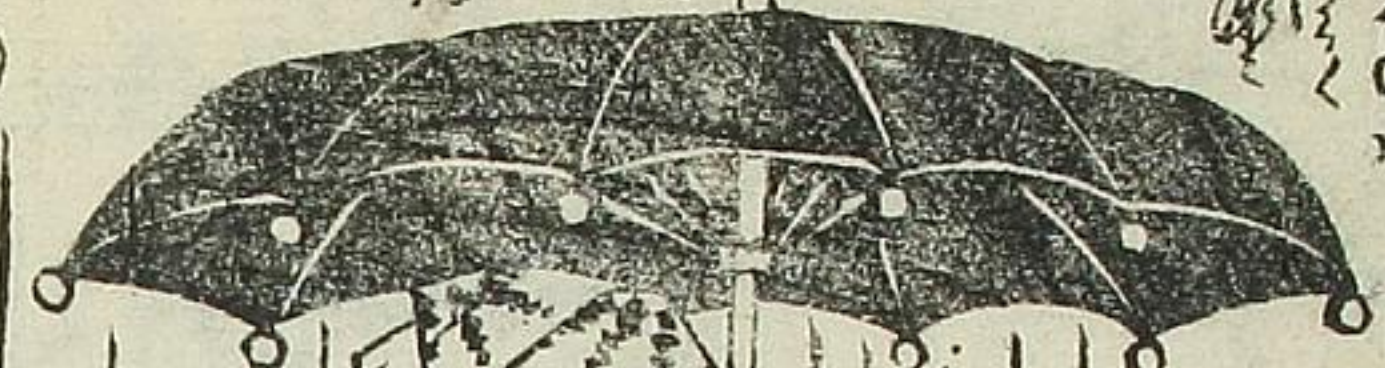


月よ雲  
 鴈の  
 玉章  
 三編

中三巻

加賀吉梅

ついでにその  
おしあがり  
寝子の  
結り  
傘  
白襟  
ゆきか  
急ぐか  
諸ふれへ一



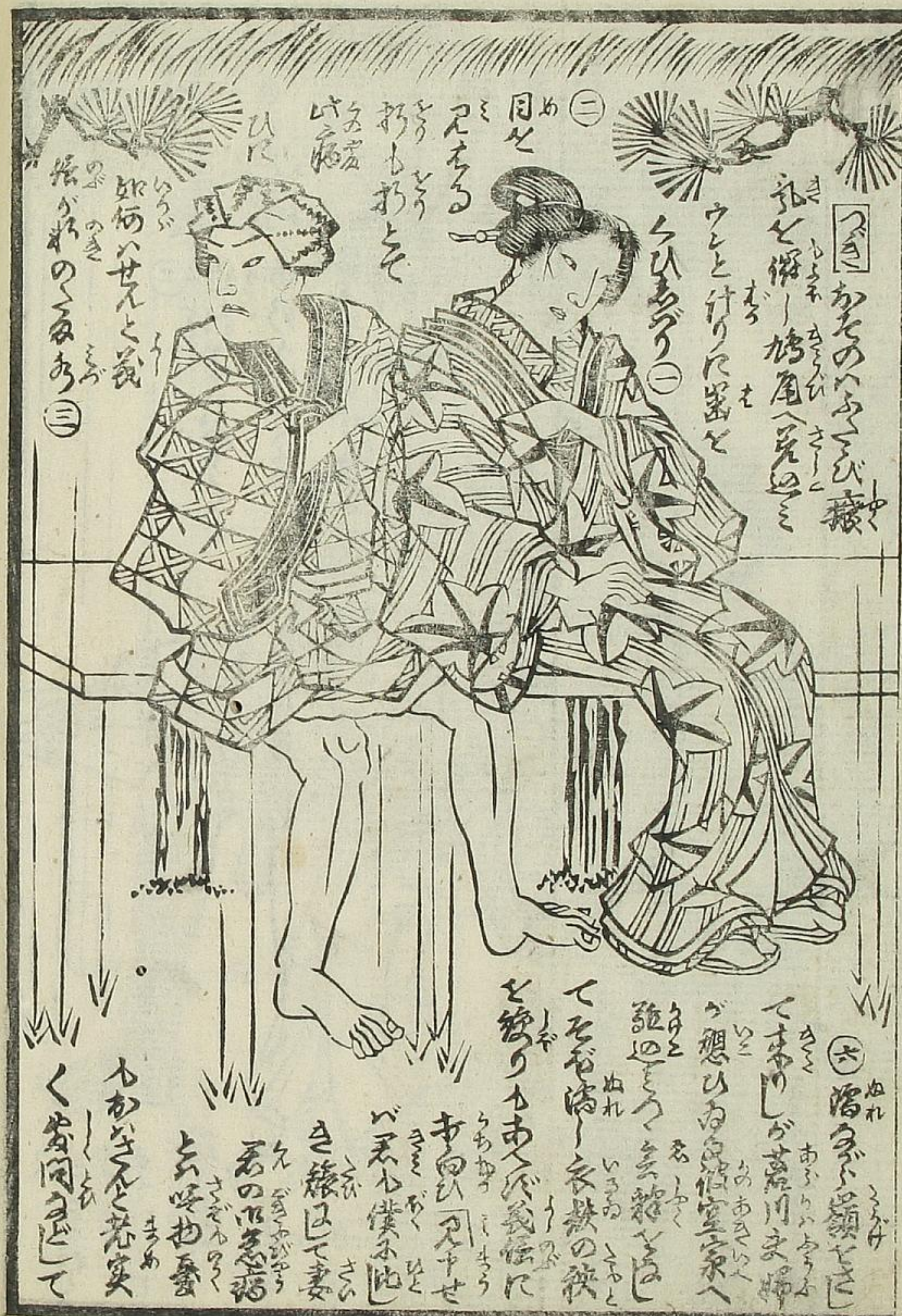
六 主出小佛を味なると笑ふにぬき入る  
七 海出にこれなる余りするふ日  
八 ぬき入る  
九 ぬき入る  
十 ぬき入る  
十一 ぬき入る  
十二 ぬき入る  
十三 ぬき入る  
十四 ぬき入る  
十五 ぬき入る  
十六 ぬき入る  
十七 ぬき入る  
十八 ぬき入る  
十九 ぬき入る  
二十 ぬき入る



四  
その  
まふ  
保  
不  
五

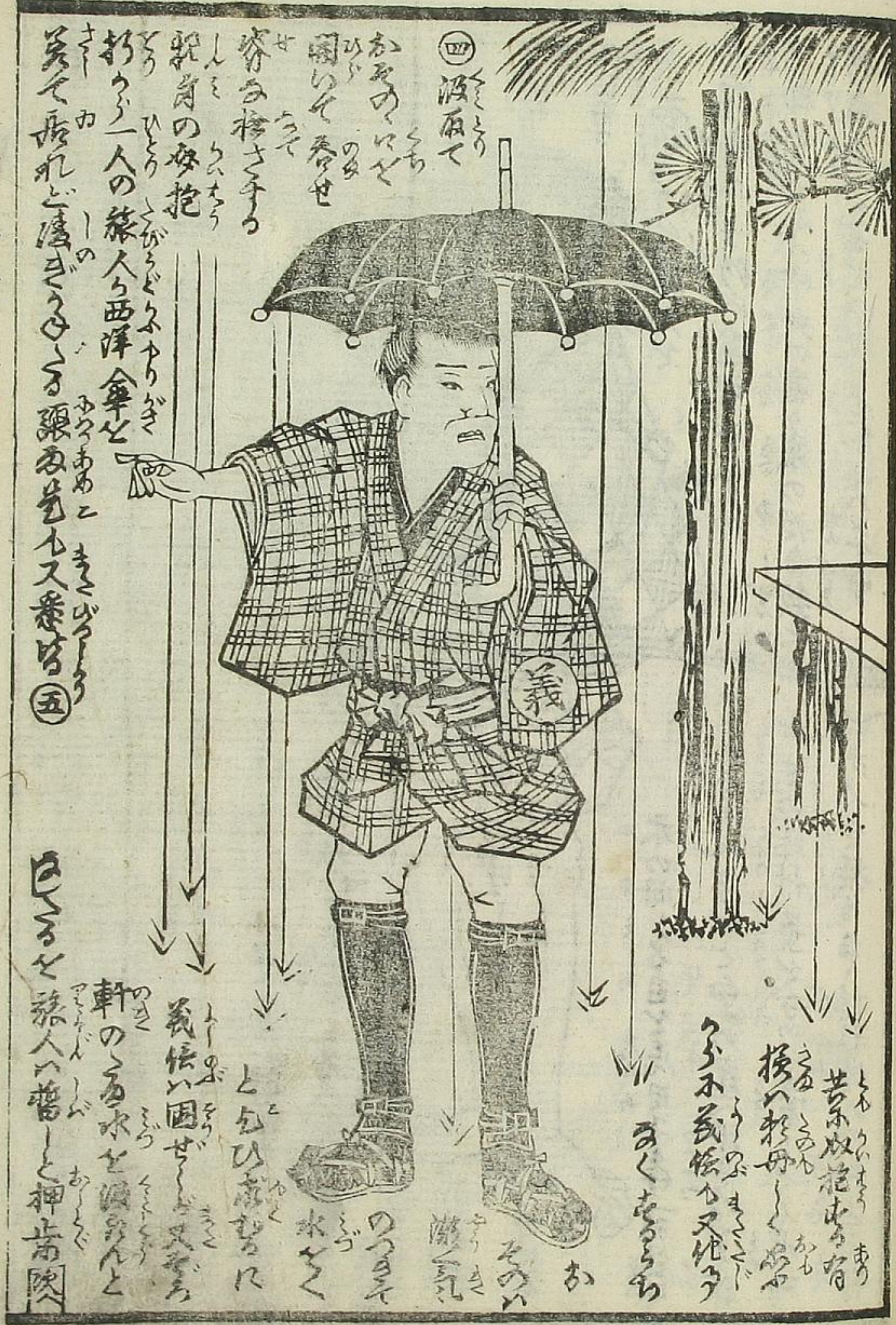
六  
運初  
歩  
七  
八  
九  
十

十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十



① かののへあまび様  
 乳と備へ格角へ見ゆ  
 ウとけりた密と  
 今ひまろ  
 ② 同  
 足もろ  
 折もろとを  
 げろ  
 ③ 何のせんとい  
 格のろるあ

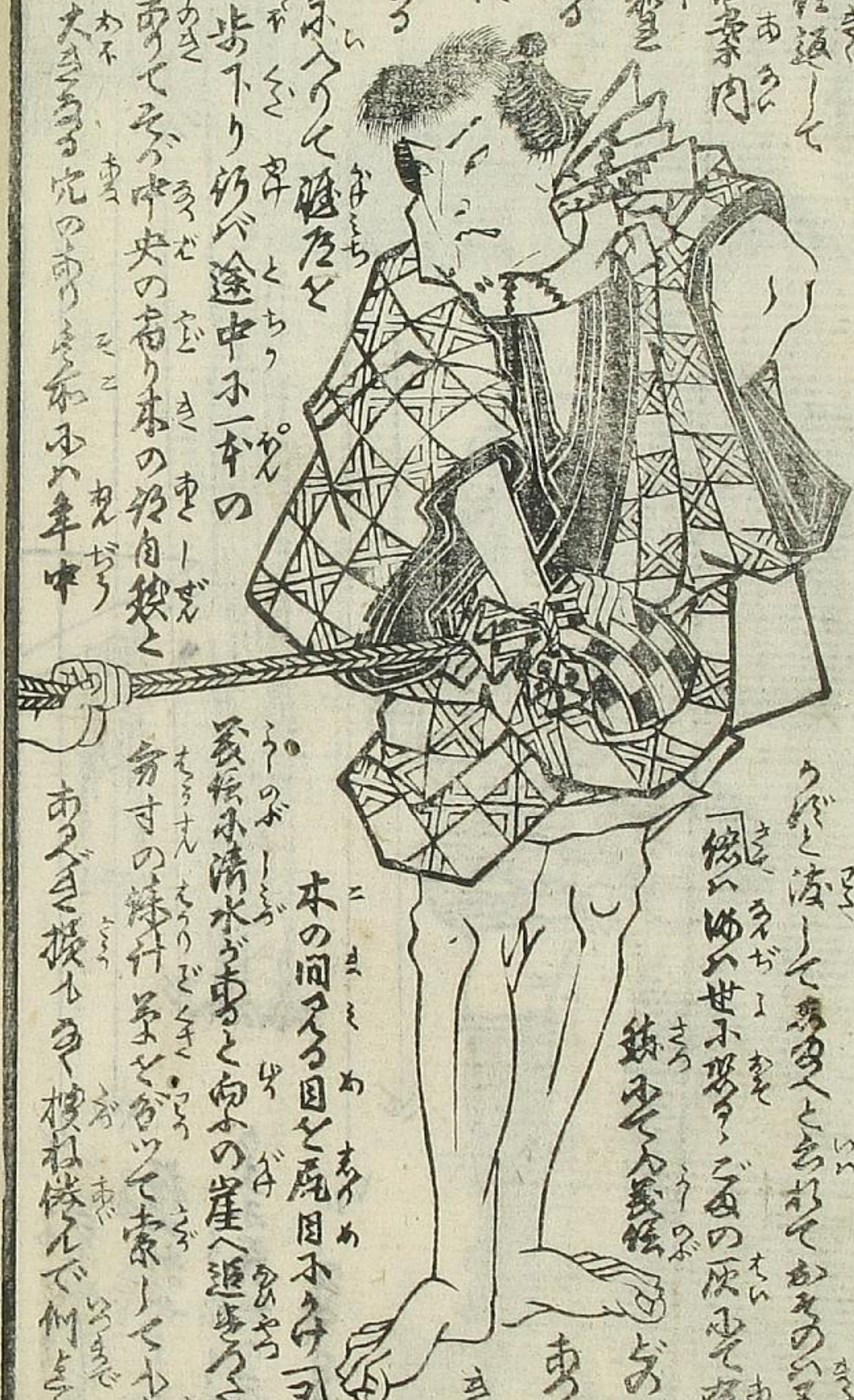
④ 濡る  
 かののい  
 ひろ  
 園のそ  
 済む格さす  
 しん  
 親の女抱  
 折る一人の縁人  
 美て所れと清さ  
 ⑤ 義  
 義信の因  
 軒の  
 孫人へ  
 ⑥ 濡る  
 てま  
 が想ひ  
 絶  
 てそ  
 と後  
 ち白  
 ば  
 縁  
 君の  
 去  
 ち  
 く



④ 濡る  
 かののい  
 ひろ  
 園のそ  
 済む格さす  
 しん  
 親の女抱  
 折る一人の縁人  
 美て所れと清さ  
 ⑤ 義  
 義信の因  
 軒の  
 孫人へ  
 ⑥ 濡る  
 てま  
 が想ひ  
 絶  
 てそ  
 と後  
 ち白  
 ば  
 縁  
 君の  
 去  
 ち  
 く



ついでいづく侍様は其家根を留めて置る  
 ④ 云々云々 何故と入思地は河邊り  
 一遍も七知の海流を必抱き置る  
 白眼を垂る懐中へ七知の目録の紙を  
 うけと取りて其内とあけておきの紙を  
 懐中へ入れ置る  
 ⑤ 云々云々 何故と入思地は河邊り  
 一遍も七知の海流を必抱き置る  
 白眼を垂る懐中へ七知の目録の紙を  
 うけと取りて其内とあけておきの紙を  
 懐中へ入れ置る



冷水の湯りとうて夏田つを熱お由固る  
 りるく疎お人の心の痛く西きねたお  
 別る同若るがらににきりて  
 水とさう熱さうさう我  
 自伴の老人より春夫底  
 く吸ふあうぬと如何せん  
 放お吾傷いお病人と普一  
 の間形りやせよおの直ちお  
 彼をへり波清水と手拭ひ  
 きん入浴させを束て上あへと  
 ひと守りおおの左面と手直  
 也忠事う見が元清あく慮を  
 るん義任と除くそと一

② ぬんさす  
 旅人へお抱へて実熱をえん入置  
 懐中の紙入奪んとほくおおそのハ  
 驚かすもすさう可い喃  
 ③ おおのハ





つぎは方へ又南を三室と名ひしが毒と含り  
 四つありと驚か終の縁合を境と一

四

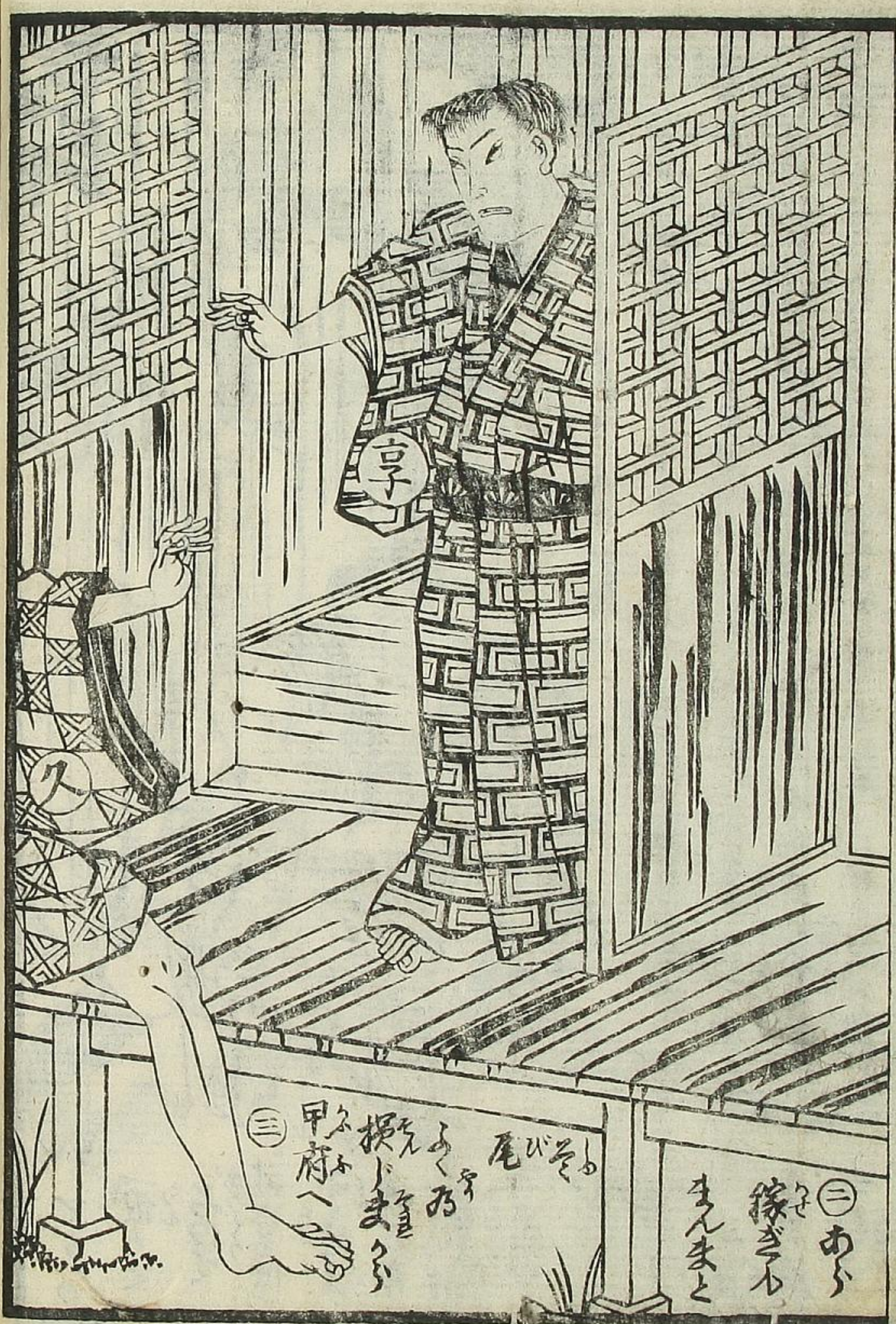
あつた  
 おもひくおもひくは十字  
 半の縁と樹を  
 珠は如く別人  
 あつた  
 源流のふ個  
 中と竹  
 馬の友  
 あつた  
 け方ハ  
 足返り  
 獨と子



三 世りて突つてす世の中身小腰徳を  
 奇きウレと御名に倒るるをそをきりて曲者ハ足返り九せは  
 夏と犯し鐘の方へとせりゆある辻をそ又はとるを和お別うて  
 ホツと息破世様小腰赤子息次々折小十字室の中男の聲  
 ありて一は和ふるの練るる久三赤あはあはげと聲聞らむて三

とらち  
 飛りと  
 あつて  
 吃驚世  
 小和ふる  
 傳三赤  
 (京の幼  
 赤子) 声  
 ありて  
 次へ

馬五郎三



③あふ  
縁さし  
生んま

尾がさ  
くろ  
撰しま  
甲府へ



①  
ついでに  
遇ふり  
由緒あり  
小久二  
の傍  
あり  
交際  
智を  
鏡つ

ついでに  
遇ふり  
由緒あり  
小久二  
の傍  
あり  
交際  
智を  
鏡つ

④  
新  
次

④  
新  
次

十九日まき雷の晴まされ杖を二人が呉分へゆくと  
 返る折にその豪家の娘と名越ては頭を一つ一個の曲者  
 彼奴と腹さへ秋々々連累の枕藪受ると享ゆんとするど  
 主をさう久しめゆて人の存をわかれおくとと蹴りして  
 廻らん物と名越ては後不意ひ引止し一々主をさう  
 享ゆと止めゆてその不意の籠へ入る  
 享月の世し小使のどねるも久し  
 思ふにと懐懐と休夜曲者の  
 木の間に逃入享ゆの如  
 く飛せし跡々「は」と  
 ありと返しが享ゆへ  
 夜の曲者の一

三 休久しゆてゆく  
 久しと旅人の和を未ぬ人  
 享ゆと小知なげなを以  
 後不意ひ引止し一々  
 主をさう  
 返る折にその豪家の娘と名越ては頭を一つ一個の曲者  
 彼奴と腹さへ秋々々連累の枕藪受ると享ゆんとするど  
 主をさう久しめゆて人の存をわかれおくとと蹴りして  
 廻らん物と名越ては後不意ひ引止し一々主をさう  
 享ゆと止めゆてその不意の籠へ入る  
 享月の世し小使のどねるも久し  
 思ふにと懐懐と休夜曲者の  
 木の間に逃入享ゆの如  
 く飛せし跡々「は」と  
 ありと返しが享ゆへ  
 夜の曲者の一

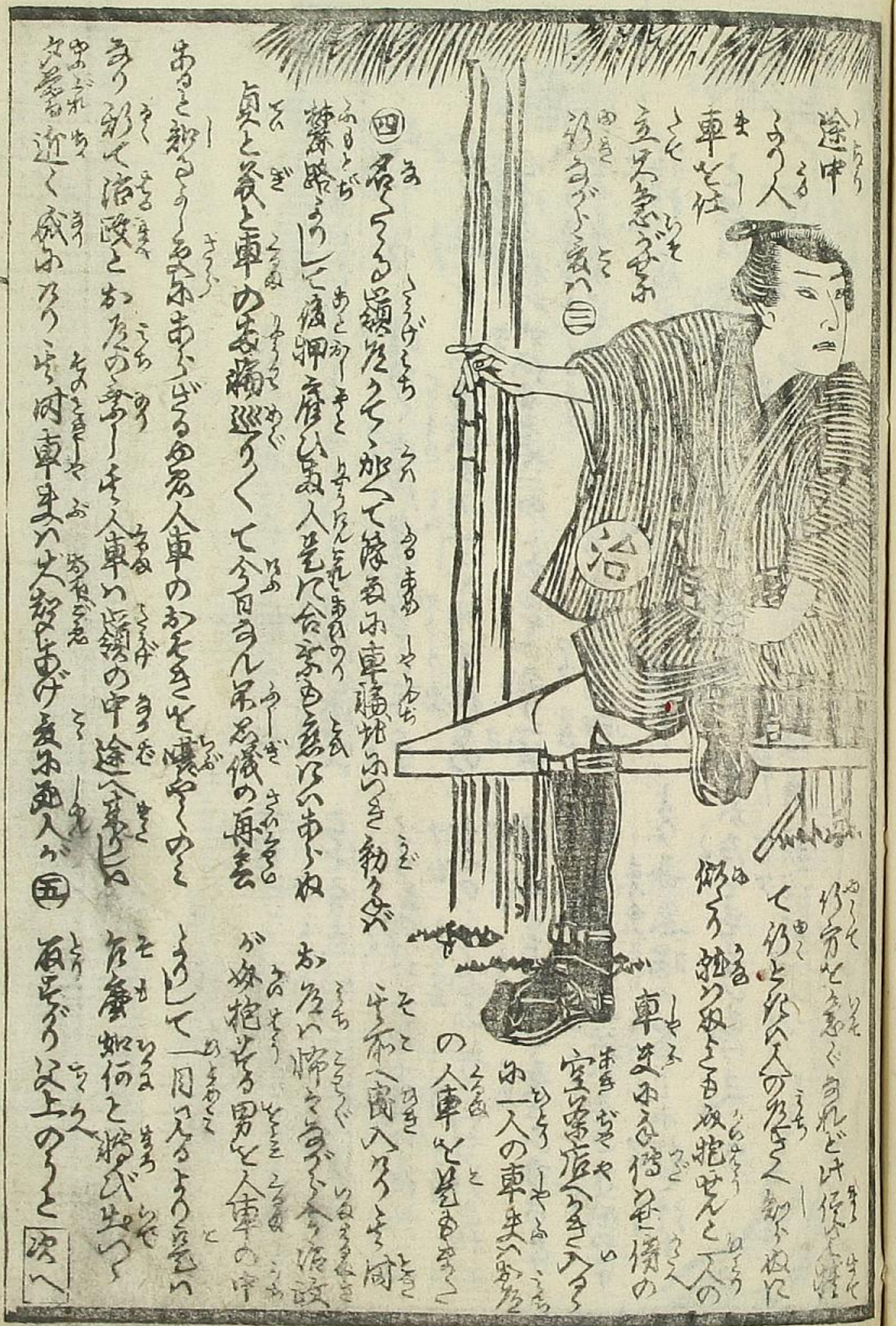


川の娘おなをぬ抱きし来  
 京と立出るとは如何せん  
 かなの身難癒芳しと道  
 さへのとて放棄とては  
 涙とみしと  
 全月廿日  
 の夜に下  
 酌本行  
 酔(一)名  
 此酒が  
 酒政ハ  
 此酒は  
 此酒は  
 此酒は  
 此酒は



① 夫の如く  
 ② 甲子の如く  
 ③ 生指の如く  
 夫の如く  
 甲子の如く  
 生指の如く

④ 夫の如く  
 ⑤ 夫の如く  
 ⑥ 夫の如く  
 ⑦ 夫の如く  
 ⑧ 夫の如く  
 ⑨ 夫の如く  
 ⑩ 夫の如く



④ 夫の如く  
 ⑤ 夫の如く  
 ⑥ 夫の如く  
 ⑦ 夫の如く  
 ⑧ 夫の如く  
 ⑨ 夫の如く  
 ⑩ 夫の如く

⑪ 夫の如く  
 ⑫ 夫の如く  
 ⑬ 夫の如く  
 ⑭ 夫の如く  
 ⑮ 夫の如く  
 ⑯ 夫の如く  
 ⑰ 夫の如く  
 ⑱ 夫の如く  
 ⑲ 夫の如く  
 ⑳ 夫の如く

① 浪山が小治政に又發奮さし今け死骸を  
 ② 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ③ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ④ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑤ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑥ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑦ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑧ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑨ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑩ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑪ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑫ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑬ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑭ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑮ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑯ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑰ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑱ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑲ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ⑳ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉑ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉒ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉓ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉔ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉕ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉖ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉗ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉘ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉙ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉚ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉛ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉜ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉝ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉞ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㉟ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊱ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊲ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊳ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊴ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊵ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊶ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊷ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊸ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊹ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊺ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊻ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊼ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊽ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊾ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ  
 ㊿ 呆れと誓ひ此後「さ」がや、あつてよ



荒磯割烹鯉魚鰯 五編 久保田彦作著  
 守川周重画

繪巻の菊操鏡 三編 守川周重画  
 孟奇若虎画

冬之兎立闇鳩 三編 守川周重画  
 孟奇若虎画

舍錦繪問屋 日本橋區兩國吉川町五番地  
 青盛堂 加賀屋 堤 古兵衛

櫻齋房種画



加賀吉梓

下之巻







吾のれを 吾のれを 吾のれを 吾のれを 吾のれを 吾のれを 吾のれを 吾のれを 吾のれを 吾のれを

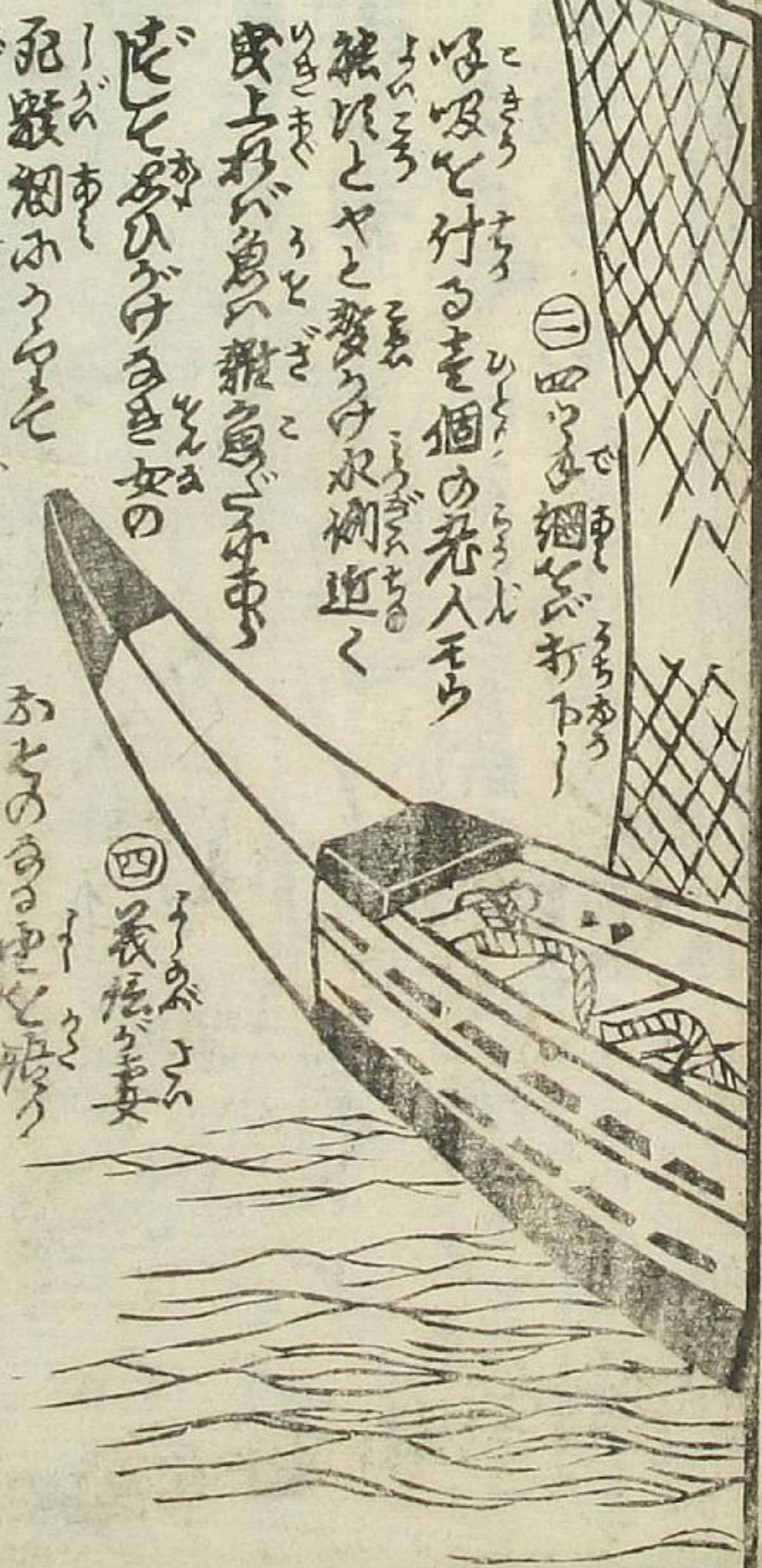
めんとや 昔の道さうか とうくとあはれ



か披司おん云 魚小袋伝らあ 龍び洞をわん 西の小舟やわんか

ハ赤の物本持 西と東へ生

死の海よりきた 山ひらろ海てあれ 何と云ふ入相と



暮れぬや 一の夜を 夜後の

魚を漁んどの 魚を漁んどの 魚を漁んどの

の也上へ一 令村の士族荒川

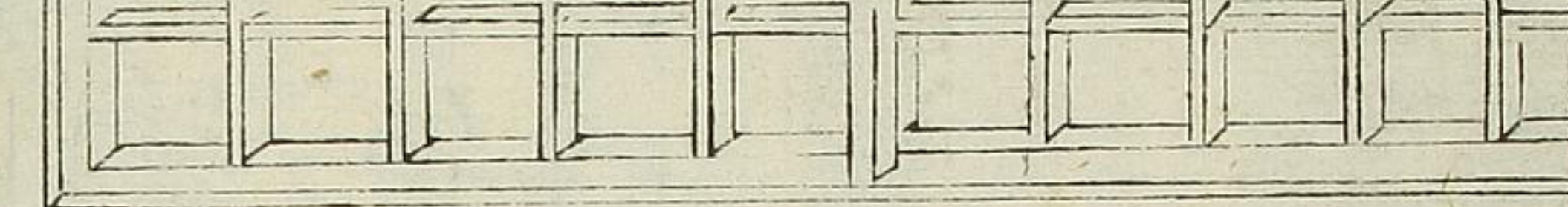
四の夜を 四の夜を 四の夜を

四の夜を 四の夜を 四の夜を

再の夜を 再の夜を 再の夜を 再の夜を 再の夜を 再の夜を 再の夜を 再の夜を 再の夜を 再の夜を



つぎあつち  
 自他へ行ゆ  
 益の事業  
 ありきや  
 並み並み  
 ありぬかど  
 思ふべきと  
 云はせ荒  
 川親子の  
 老へ死骸の  
 見えぬと  
 本意ま  
 ありと  
 ありと



(二) ひとくち  
 子守り  
 主故の  
 継入甲  
 府と  
 こそ (三)

(四) 仍きよ  
 向表と月  
 路と彼方  
 ありと

てあつち  
 の如何ぞ  
 文之節  
 知恵あり  
 ありと

返らぬ  
 速し  
 又小佛  
 又ぞあり  
 疾の  
 帝源  
 过半  
 互ひ  
 ト  
 京の  
 赤白  
 是より  
 是く



ひて  
 ありと  
 約本  
 へ  
 三人  
 出立  
 次へ

馬車

これほかに江崎新太郎の約本持録を  
藤川太郎と休むとち日を極々東京  
根着るに依るの方と同日に也

甘る小麻布を  
多くもあふふり殊  
まわわどいりや  
る(越)き交り借る等の  
昔家多とあると傍一  
あれど是の先年  
八五の在村の引越  
今い夜も此とに引越さし  
先ひに依りてのみお止んと又々  
根着へ傍一より今更に幸のぬり



二 扱由藤川と始め  
て新太郎とて依る  
改の取りに依る日  
相立日とて依る日  
その後何日由る依  
る死といひ殊に最  
終の妻とて依りて  
隠のれはせし  
根着あふふり  
根着より遊在  
る上藤川村の  
所有の田畑もある  
りるに依るに

四

片断の小引書集の初巻に互ひの事迄後の  
傍一に及速書あて四五日を以て著すは  
葛ヶ川とて或日荒川後傍の  
死せしといひ最に傍一  
と引連て突然とぬり来り  
昔家方へも頼とてる小引書の二入の  
扱はるる一方ありはるは藤川に  
初より○此考格中  
と越方のお傍りの  
あふふりたりて看客  
の傍傍をわたりて見  
自小依傍とて傍一  
扱て果るといふ人早くと遊遊



世と安くと  
らんのと  
素の初書  
あふ傍知  
傍一殊小  
あふ傍の  
喪の傍  
と結て聲  
書手とて手紙の  
小寄合へ引越さし  
る一不依方由る  
のりて引越(遊)遊  
二世帯合併一藤川村

○ 移世世の年卯月の卯の卯の卯

○ 卯七又伍着京の二群の

歩め二人の

踏用のをん

とま世小困下果モウ

大概ありて来る近々

身と後つれと踏を志

かこる井戸踏

有海田庄といふ

後度ゆりゆりど香を赤

むさろ亭久二弟小打良

此間よりとふ結を同いさじ



○ 家外小婿焼畑共家身共の務あは

浴の浴一はまをめてとそ娘人の法を家

又百世の法を

と求といふ

と持るの

農夫あは

歩つがと

まよあは

あく踏の

け踏の先

より初るに

らんといひこれ

のあはして今日

あは

あは

あは

あは

あは

あは

あは

あは

あは

あは

あは

あは

あは

あは

あは

あは

あは

あは

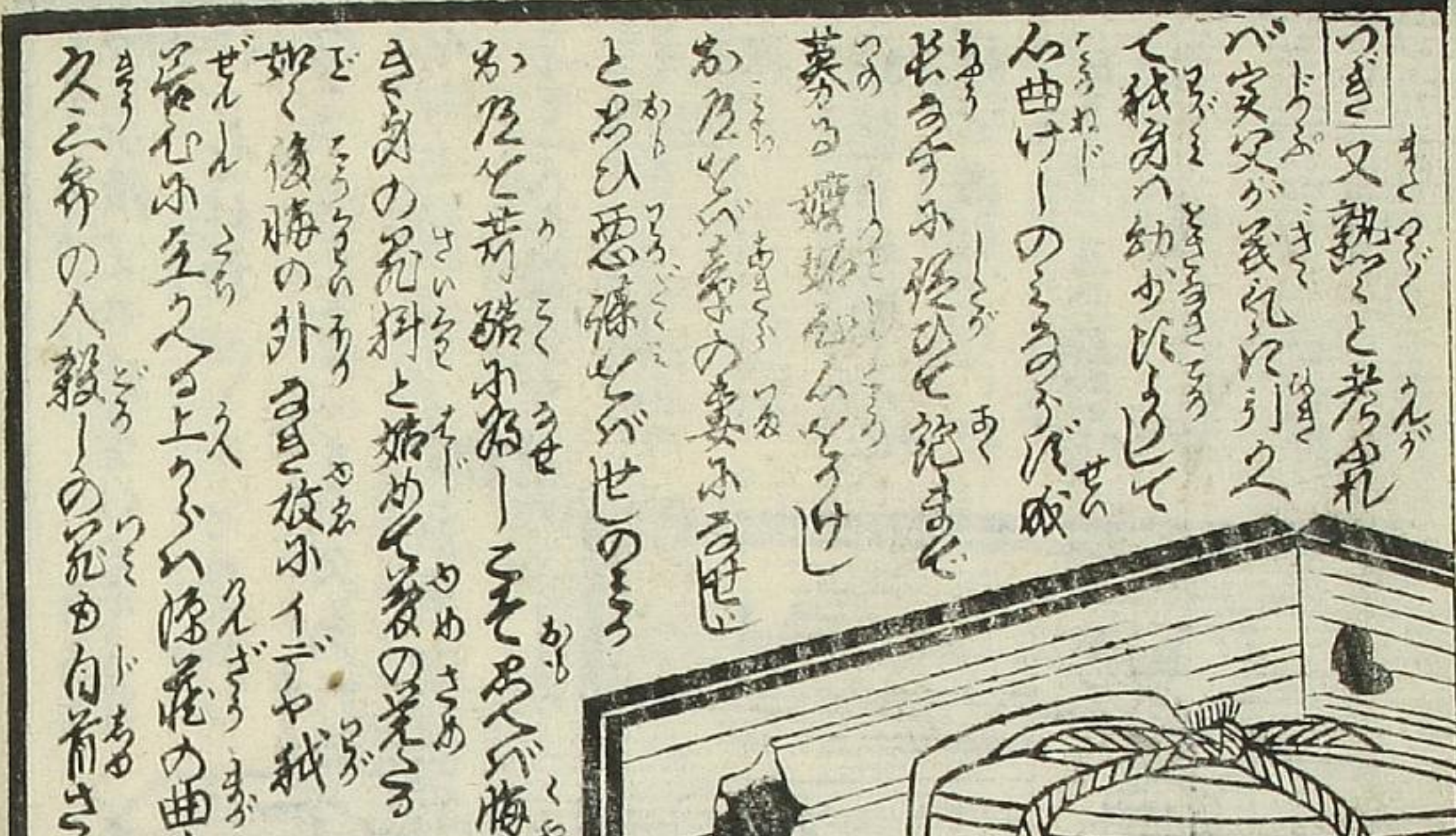
とややが 始めけけけ 結を仕損せといふ 何 ありありと 同いさじ 久二 弟小打良 を打さ 結をり 矢の 武甲山の 林 蘇 あて一人の 娘人を 道つ の 一か



あは けけけ 結を 仕損せ といふ 何 ありありと 同いさじ 久二 弟小打良 を打さ 結をり 矢の 武甲山の 林 蘇 あて一人の 娘人を 道つ の 一か

つぎ又執事と考れ  
 父父が長に引之  
 て絨育へ幼少は遠て  
 心曲けいのまのふ成  
 るひさし不後ひを記  
 幕の端始むんとけし  
 お及たの家の妻ふる世  
 とお以悪縁と世のま  
 か及と苛疎おぬこそ  
 き身の危料と始めて  
 如く後悔の外より放  
 束心ふる上りふる海  
 久二糸の人殺の危由  
 前させんと夜中お

藤乃と主ゆるとり久と  
 藤乃の藤乃の藤乃の  
 藤乃の藤乃の藤乃の



おのりて居んを  
 重前にて後せん  
 け後何ゆと打  
 同入藤乃由東  
 引は言并戸誰と  
 主出て夫口の方  
 里つと  
 おのり  
 在雨と  
 尋ねね  
 以き討  
 面ふ不若  
 の死と信



藤乃と主ゆるとり久と

おのりて居んを  
 重前にて後せん  
 け後何ゆと打  
 同入藤乃由東  
 引は言并戸誰と  
 主出て夫口の方  
 里つと  
 おのり  
 在雨と  
 尋ねね  
 以き討  
 面ふ不若  
 の死と信

つぎに次来形也と事也今  
生むく対面せんと云わく  
は方の主人いあれい地物  
とわろくやて



あはれ 様前を主とする人の  
男女を別つる別人  
あはれ 花川表  
任事あとの  
婿あはれ 依る後治政用か

二 吾の振寄(母)  
後高合村(引)に  
とひれ者  
政務を  
次は初ハ  
死後と  
尋ね人止  
矢のよ上  
とらあに  
正にわ色の  
管民のまより先  
おろろ度とハ股  
ひあけ花さう  
あはれ 中  
あはれ

あはれ 止めりと  
と境を幾心仿  
あはれ 及上  
あはれ 見の及  
あはれ かの邊  
あはれ 五枚尻  
川六人と  
新を弟  
と便一  
あはれ 川下  
あはれ 孔巖  
と尋ねと  
あはれ 瀬上

まはれ 徳新義徳の本

あはれ 各自適  
は方の二人ハ二名  
あはれ 多の情合をのねの知の由い  
あはれ 手同義徳と進め一のう事也是下が海勝の  
あはれ りいも二回もれぬと徳新の衣物を紙の  
あはれ 事さす由今お玉つて求解せうと云わく花  
あはれ 言と指示し是るのれ和之の實父は徳新を  
あはれ 大人さるがよもいふは是由の法又之  
あはれ 白のあまとのか兄は後治政故のあり  
あはれ と云わく又云わく我を夫婦い云云  
あはれ 少く小佛羅で難敷はけりは始ふ法は(一)



あはれ 源  
あはれ 宗



あはれ 川下  
あはれ 孔巖  
あはれ と尋ねと  
あはれ 瀬上



① 夜明けの静けさ  
 ② 老實く〜〜之の法入  
 ③ 又源流の治政不  
 ④ 又源流の治政不  
 ⑤ 又源流の治政不  
 ⑥ 又源流の治政不  
 ⑦ 又源流の治政不  
 ⑧ 又源流の治政不  
 ⑨ 又源流の治政不  
 ⑩ 又源流の治政不



伍反河  
 京へ今  
 又小面目  
 多かれと如何せん  
 原素と謝しく燃  
 共小振と結し結い  
 ④ 又源流の治政不  
 ⑤ 又源流の治政不  
 ⑥ 又源流の治政不  
 ⑦ 又源流の治政不  
 ⑧ 又源流の治政不  
 ⑨ 又源流の治政不  
 ⑩ 又源流の治政不



① 又源流の治政不  
 ② 又源流の治政不  
 ③ 又源流の治政不  
 ④ 又源流の治政不  
 ⑤ 又源流の治政不  
 ⑥ 又源流の治政不  
 ⑦ 又源流の治政不  
 ⑧ 又源流の治政不  
 ⑨ 又源流の治政不  
 ⑩ 又源流の治政不

ついで長く巻きの因と然りと後不承刀  
喜びていよく和熟あり方と是ハ足成

御届明治十四年九月五日

### 月雲鳳玉章

二編大尾

本橋町二丁目十五番地  
編輯人 伊東專三  
日本橋區吉川町五番地  
出版人 堤 吉兵衛

此圖の紙上ハ  
摺りかえり  
女机急年の同ハ  
のりせし倭儀平佐  
さるやけ交ぬえのりあり  
後トて原稿の刻る所ハ(一)



### 櫻齋房種画

矢七福あはしてと愛あめ  
考冊子小察りる也(由地るる三)

区あふ  
はつと  
はつと  
はつと  
はつと  
はつと

### 荒磯割烹鯉魚腸

八代目團十郎のはなし

五編 久保田彦作著  
守川周重画

### 篠の菊操鏡

渡辺支京作

三編  
守川周重画

### 金花胡蝶

渡辺支京作

三編  
守川周重画

### 冬見立闇鳩

守川周重画

三編  
守川周重画

### 水藻塩草近世奇談

藤田仙果作

三編  
守川周重画

### 合 地水問屋

日本橋區西國吉川町五番地  
青盛堂  
加賀屋

### 堤 吉兵衛



010190514663

